



TITLE:

# 古代猶太共同體の成立 - 古代猶太の共同體(一) -

AUTHOR(S):

澤崎, 堅造

---

CITATION:

澤崎, 堅造. 古代猶太共同體の成立 - 古代猶太の共同體(一) -. 經濟論叢  
1941, 53(3): 338-352

ISSUE DATE:

1941-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/131588>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷三十五第

月九年六十和昭

## 論叢

現代世界學としての日本學の根本理念……………經濟學博士 石川興二

支那の田賦整理……………經濟學博士 八木芳之助

企業原理と企業規模……………經濟學士 大塚一朗

資金調整の課題……………經濟學士 中谷實

ロバートソンの四つの係數の理論……………經濟學士 青山秀夫

## 研究

經濟社會學の基本概念……………經濟學士 北野熊喜男

古代猶太共同體の成立……………經濟學士 澤崎堅造

## 說苑

ボオル・ベルナルの佛印工業化論……………經濟學博士 松岡孝兒

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

## 古代猶太共同體の成立

— 古代猶太の共同體(一) —

澤 崎 堅 造

## 一 序

古代猶太と云ふのは、大體西紀前の猶太を指してゐるのである。それは中世と近世の猶太問題が夫々に特色を持つてゐるので、それらに對して特に古代を一括して考察するのが便宜だからである。併しより詳しく云へば、紀元後七十年に猶太の首都エルサレムが羅馬軍のために陥落し、それ以後國は全く滅びて離散の民となつたが、その時以前を指して云ふのである。<sup>1)</sup>

従つてそれ以後の猶太人は古代とは色々な意味で形は異つてゐるけれども、併しその本質に於ては勿論一貫したものである。宗教上、政治上、文化上、經濟上の色々な問題には、總べて深い根柢と遠い因縁とがあることを示してゐる。いまその一々について考察する暇はないが、たゞこゝに彼らの集團的・連帶的な存在或は共同體的な在り方といふものについてども、それが假令さうせざるを得ない必然さから出たものであつても、そこには餘程深い因縁があつたであらうとは容易に想像される。また宗教的に見ても、今日所謂猶太教・基督教・同々教の三者は何れもこの古代猶太の宗教の影響を受けたものであると云ふことが出来る。所謂猶太教とは、大體猶太人のバビロン捕囚以後發達したものであるから、紀元前五八六年以後、即ち古代猶太と云ふに一括してゐる時期の餘程後期に當る頃發生したものである。この猶太教は、今日なに世界の離散猶太人の多くのものに信奉されてゐる

1) 三浦新七博士、「宗教を通じて見たる古代猶太の國民性」商學研究第一卷第一號二八頁參照。Max Weber の Das antike Judentum, G. A. R. III, S. 1-400 は大體バビロン捕囚前まで。

る。(尤も猶太人にして基督教に回宗してゐるものもあるが。)次に基督教は、紀元一世紀以後起つたものであるが、それは猶太の地に生れ、猶太教の何らかの影響の下に育つたことは云ふまでもない。教義の内容に於ては新しいものがあり、その後期の發達に於ては却つて對立的なものとなつたが、また同々教は紀元後七世紀頃から起つたが、これは猶太教、基督教の直接的又は間接的な影響を受けた。殊にその發生がアラビアの沙漠に於てゐると云ふことは、より一層猶太教或は古代猶太の宗教に關聯があつたであらうと云はなければならぬ。要之、今日世界の三大宗教が何れもこの古代猶太の宗教に關聯があると云はなければならぬ。所謂舊約聖書はこの古代猶太の宗教の信仰、精神、及び出來事を記載したものであるが、この大部分が何れも今日なほ三大宗教の共通の宗典となつてゐると云ふことだけでもわかると思ふ。

この様な意味を持つてゐる古代猶太の、特に共同體について考察しようと思ふのであるが、それには先づその成立といふ問題、即ち古代猶太の共同體的在り方が何時、如何様にして發生したのであるか、またその根柢にあり且つその後の生成の途上に常にこれを支へたものは何んであるかについて考察しようと思ふ。

古代猶太と云ふのを大きく二つに分ければ、モーゼの出埃及(紀元前一四四五年前後か)<sup>2)</sup>の前と後となると思ふ。出埃及の直ぐ後に於て古代猶太の共同體が明確に成立したと思ふが、併しそれ以前の長い時期に亙つて次第に準備されたものであることは云ふまでもない。殊にアブラハムやヤコブの頃に一段の發展を示したことも見られる併しそれはやはり準備の時代であつた。出埃及の以後、古代猶太の歴史は大體三段に分けられる。第一はアラビアの沙漠を背景にし、モーゼをその指導者とするイスラエル宗族の民族的共同體の成立の時期である。<sup>3)</sup>第二はカン農業文化を背景とし、士師或はダビデ、ソロモン等を統率者とする政治的國家の成立の時期、<sup>4)</sup>第三は捕囚前後から、バビロン、ペルシア、ギリシア、ローマ等外國の政治的、文化的影響を受け、商業的都市生活の背景下に

- 2) 猶太教は此の外に Talmud 及 Midrash、基督教は新約聖書、同々教は Koran を持つてゐる。
- 3) 淺野順一氏、「舊約聖書」八八頁參照。この外に B.C. 1220年説がある。なほ Cf. T. H. Robinson; A History of Israel, Vol. I, 1932, p. 71 ff.

大祭司の下にあつた祭祀的猶太教團の時期である。

これらの期間を通して、また最初猶太共同體を成立させた根柢的な條件と云つたものは、大體二つの方面から考察される。それはまづ自然的方面から、特に地縁と血縁とについて。次には宗教的方面から。そしてこの後者は前者よりもより中心的な重要さを持つてゐると思はれる。

## 二 自然的

(一) 地縁 古代猶太の諸族即ちイスラエル民族が生活し且つ移動した地域は、大きく云へば亞細亞・歐羅巴・亞弗利加の三大陸の接合地點である。それは大體アラビアの大沙漠とその北邊を東西に大きく隔る半月形の農耕地帯とから成つてゐる。それは東チグリス・ユーフラテス兩河の流域メソポタミアの平原と、西ナイル河の流域埃及の平原とを結ぶ細い帶の様な地帯である。

アラビア大沙漠は、ペルシア灣と紅海とに挟まれた約一二〇〇平方哩の方形的半島の大部分を占める。その東西の海岸地帯に幾條かの山脈が南北に走るが、それから海岸までの僅かの地域を除いては大部分不毛の高原である。たゞ僅かにその中に點々として綠地があるだけである。これに反して、その周圍に取巻く農耕地帯は何れも豐饒な土地で、古來早くから文化が開けた。このメソポタミアと埃及とを繋ぐ一條の地帯の西寄り、即ち地中海に沿つたところがパレスチナと云はれ、殊にも狭い。幅員の最も狭い處は東西二〇哩、最も廣い處でも六〇哩に過ぎない。ヨルダン溪谷以西の面積は、我が國の四國よりも小さいと云ふ。而もその中央に山脈が縱走し、山岳丘陵は幾重にも起伏してゐる。平原は僅かに西寄りの沿岸地帯と山脈以東のヨルダン溪谷とだけである。而もこのヨルダン溪谷は、世界最低の地と稱せられ、その死海は地中海の海面より一九二九呎も低いと云ふ。この低

- 4) B.C. 1450年頃から、同1400年頃(カナン侵入)まで。
- 5) B.C. 1400年頃から、同721年(北イスラエル滅亡)頃まで。
- 6) B.C. 721年頃から、A.D. 70年(ユダ滅亡)頃まで。
- 1) 河邊滿齋氏、「概説舊約地誌」三〇頁。

い地峡から、併しながら北方を望むならば四時雪を戴くヘルモン山(海拔九三八三呎)が見えると云ふ。かゝる地勢にあつては氣候の變化も幾様であつて、従つて動物や植物にしても寒帶・溫帶・熱帶の殆んど總べてのものが生育する條件を備へてゐると云ふ。聖書にも「雪の時に下りて、穴の中にて獅子<sup>2)</sup>を擊殺せり」とある位であり、正に全世界の縮圖的地形である。

かゝる一種異様な、不思議なる地勢にあつて古代猶太の共同體が生成したのであると云ふことは極めて興味深い。殊にこの狭い地帶を通つて古來幾多の民族、政治、文化、軍隊、商人が往來したのである。あらゆる意味に於て陸橋と云ふに適はしい。

(二) 血縁 古代猶太即ちイスラエルの遠き先祖は、アラビアの大沙漠から出たセム人種の一つであるといふセム人種は初めアラビアに在つたが、沃地を求めて東西に移動を初めた。その移動の大きなものは、紀元前に於て大體四回ある<sup>3)</sup>。第一回は紀元前三十五世紀のパビロニア移住團で、これは東北に往き、第二回は紀元前二十五世紀のアモリ、カナン移住團で、これは西に往き所謂カナン人の先祖となつた。第三回はアラム移住團で、これは紀元前十五世紀に初め北に往き、それから西南に下つた。イスラエル民族の先祖はこの中にある。第四回は紀元前五世紀のナバデア移住團である。これらのセム人種移住團からして後に、サベア族、エチオピア族、アラビア族、パビロニア族(古代パビロニア族、アツシリア族、カルデア族を含む)、アラム族(メソポタミア族、フニキア族を含む)、またヒブル族(ヒブル族、モアブ族、エドム族を含む)等が發生した。

これらの中アラム族及びヒブル族を含む第三回のアラム移住團は、紀元前二〇〇〇年頃から遅くとも前一五〇〇年頃までに移住し、初めパビロンの東方キルに往つたが、既に先住の同族があつたので、共に「ウル」<sup>4)</sup>の地に至り、後に更に西北に進んだ、その中ヒブル族は更に南下してカナンの地に土着したが、その主なるものはアブ

2) サムエル後、23:2.  
3) 渡邊善太氏、「概説イスラエル民族史」二四頁參照。  
4) 創世記、11:26.

ラハムを族長とするアブラハム族である。これはアラム移住團中の先驅者であつた。その族長の子イサク、また孫ヤコブの代になり、遂にヤコブは「イスラエル」(Israel)と改名することになつた。<sup>5)</sup>これは同時にヤコブ族の一段の發展であつた。イスラエルとは字義的には「神勝つ」または「神支配す」と云ふ意味である。<sup>6)</sup>従つてこゝに一段と神との直接的な交りに入れられ、その支配下に立つた、即ちこゝに相當堅い、新しい併し素朴的な宗教的共同體の段階に這入つたと見られる。このヤコブ族即ちイスラエルが中心となり、その周圍に傍系の同族が居ることゝなつた。即ちヨルダンの東、アルノン河の以北はアンモン族、アルノン河の以南はモアブ族、その更に南にはエドム族がゐた。その外にはなほ傍系として、ジムラン、ヨクシヤン、メダン、ミデアン、イシバク、シユワの六族が近くにあつた。ヨクシヤンの子シバとデダンの兩族は南アラビアに王國を建て、ミデアン族はケニ人として知られ、シナイ山の近傍にあり、後モーゼに従つてイスラエルと極めて密接な關係に這入つた。なほこの外にもイシマエル族といふのがあつた。

とにかくイスラエルと云ふのは、ヤコブ直系の諸族を含めたものである。その諸族は普通十二支族あつたとして知られてゐるが、その内譯は時代により場處によつて少しく違つてゐる。<sup>7)</sup>併し大體は、まづこれを大きく四つに分けて、第一はレア族と云ひ、それにルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルンの六族を含め、第二はラケル族と云ひ、それにヨセフとベニアミンの二族を、第三はビルハ族と云ひ、ダンとナフタリの二族を、第四はゼルパ族と云ひ、ガド、アセルの二族を夫々含むものとする。<sup>8)</sup>

**註** イスラエルの十二支族については、なほこの外に大きく二つに分けて、第一はルベン、シメオン、レビ、ユダの四族とゼブルン、ナフタリ、ガド、アセルの四族とを含み第二はヨセフとベニアミン及びイツサカルとダンの四族とするものもある。<sup>9)</sup>イスラエルの歴史に従ふと、まづ沙漠に於ける生活、即ち聖所の天幕を中央に十二支族が配置されたことが證されてゐる。<sup>10)</sup>尤もこれは恐らく紀元前五世紀頃の祭司法典記者が何らかの資料(多分エゼキエル書)に據つて書いたものであらうから、嚴密に出埃

5) 創世記、32:28.

6) 淺野前掲、四三頁。

7) E. B. Cross; The Hebrew Family, Chicago, 1927, p. 86 f.

8) Robinson; ibid, p. 60.

9) 民數紀略、2:3.

10) イ・エス・カーブ、「舊約文學概論」九〇頁。

及直後の状態を示すものと云ふことは出来ない。併し其處に掲げられた支族の名を挙げると、聖所の東にイツサカル、ユダ、ゼブルン、南にシメオン、ルベン、ガド、西にベニアミン、エフライム、マナセ、北にナフタリ、ダン、アセルの以上十二族、なほそれにレビ族(コハテ、ゲルシオン、メラリの三族とアロンの子達)があつた。

カナンの地に進入つてから、例へば士師時代(紀元前十二世紀頃)の女預言者デボラの歌には、ユダ、シメオン、ヨセフ、レビの四族の名がない。それはレビ族は特別なものとされ、ヨセフ族は既にエフライムとマナセの二族に分れた。シメオンは早く消え、ユダは獨立したのである。また紀元前十一世紀の「ヤコブの祝福」<sup>13)</sup>には、マナセとエフライムの代りに今度はヨセフが出てゐる。また紀元前九百年頃の「モーセの祝福」<sup>13)</sup>には、シメオンを除く十三族の名が擧げてある。その後王朝が立つて全民族が統一されたが、また南北に分れた。そして北イスラエル國は十族から成つてゐたが、紀元前七二一年には亡びた。また南のユダは同五八六年に國としては亡びた。その後、預言者エゼキエルがイスラエル王國の復興を幻の中に畫いたが、その中には、まづレビを中心に、北にはユダ、ルベン、エフライム、マナセ、ナフタリ、アセル、ダンの七族を置き、南にはベニアミン、シメオン、イツサカル、ゼブルン、ガドの五族を置いたことがある。<sup>15)</sup>

これらの十二支族が、全部モーゼの出埃及に従つたのでないことは前に示す通りである。モーゼはラケル族中のヨセフ族の出であるが、これが最も勢力のあつた中心的支族であつた。彼が出埃及に際しては、この外にレア族と一緒にゐた。がそれ以後、各地に進軍するに従つて諸族が参加し來つたものであらう。それは單にイスラエル族内部のもののみではなく、例へば傍族のミデアン族・ケニ人が特に親しく同盟の關係に入つたと云ふことなどもある。併しこれら諸民族の間が比較的親しい關係にあつたのは、僅かに外敵に對するとか、宗教的に共通の感情があるとか云ふ場合にあつたのであつて、それ以外にはやはり民族間の争ひは極めて劇烈であつたやうである。イスラエルに取つて世々の敵となつたアマレク人あり<sup>16)</sup>、エドム、モアブ等とは幾度戦つたことであるか。なほイスラエル同族間でも、互に激しい疾視鬭争を演じたこと幾度か數ふことも出来ない。

かゝるイスラエル民族の性格は、一言にして云ふならば複雑である。「矛盾の束」<sup>17)</sup>と云ふ言葉がよく當てはま

11) 士師記 5.  
14) 渡邊、前掲、九五頁。  
16) 出埃及記、17:8.  
18) 同上、二三頁。

12) 創世、49.  
15) エゼキエル書、47:13以下。  
17) 渡邊、前掲、二二頁。

13) 申命記、33.



る。奇激なる自然の環境、外國文化の影響、軍事的侵入、政治的統略、或は捕囚され、或は離散した、餘りにも多い試みの運命であつた。浮き世の荒浪は嘗め盡したといふ觀である。従つてその民族的性格には極めて陰影が濃い。元來沙漠の民は激烈苛酷な自然に耐えたのであつた。かゝる運命は愈々その性格を、割目の多い、忍耐深い且つ希望に燃えしめた複雑な性格を作つた。云はゞ苦勞人の性格である。肉感的であり乍ら、極めて敬虔、驚くべき忍耐と服従の力を持ちながら、時に急激な發作による犢猛性。緻密な頭腦を持ちながら、時に獨創を缺き客觀的でありながら、時に極めて主觀的である。<sup>18)</sup>

かゝるイスラエル民族の特質を更に概括して示すならば、第一に民族的であること、即ち共同体的であること。第二には宗教的であること。民族的・共同的ではあつても、政治的ではない。第三には實踐的・具體的であつて歴史を重んじ、傳統を尙ふことなどが擧げられよう。<sup>19)</sup>

### 三 宗 教 的

かくて古代猶太の共同體を成立させた他の條件について、宗教的な方面から見ることが極めて大切である。イスラエルの民は云はゞ流浪の民である。その初めはアラビアの沙漠に、それから北し西して遂に埃及に至り、更にそこを逃れて再び沙漠に歸へり、カナン・パレスチナの農耕地に入り、王國を建てたと思ふ間にまた分裂し、北はアツシリアに、南はバビロニアに夫々捕囚の運命に遭ひ、再び歸へれば、ペルシア、ギリシア、ロマ等の支配を受け、遂に滅ぼされて世界の離散の民となり、今日なほ此の状態を繼續してゐると云ふ、歴史上まれに見る悲運・不可思議なる民族である。近年の猶太人排斥も仲々激烈ではあるが、これを中世の迫害と較べれば物の數でもない<sup>1)</sup>。而もなほ今日かくも抜き難い勢力を持つてゐるのは如何なるわけであるか。それには色々な理由もあ

19) Johannes Hempel; Das Ethos des Alten Testaments, Berlin, 1938, S. 87 f.

1) 木下哲太郎氏、「ユダヤ民族迫害史」参照。

2) 「精神的」及び「祭祀的」なる言葉は、和辻哲郎博士「尊皇思想とその傳統」(岩波講座、倫理學、第一卷四〇頁)から借りた。蓋し最もよく古代猶太の共同體を

るであらうけれども、その宗教による共同體的在り方の強さに依存することが多いといふことが出来よう。その宗教とは何か。それは猶太教である。猶太教は古代猶太の極く後期に發生したものであるから、古代猶太の大半を流れた宗教思想とは異なるところがある。併しそれを承け繼いだものも多い。かくて古代猶太の宗教性は重要である。古代猶太の共同體は云はゞ精神的共同體であつて、單なる生活的共同體ではない。また祭祀的共同體であつて、單なる道義的共同體でないと云ふことが出来よう。<sup>2)</sup>

かゝる祭祀的共同體を見るには、まづ神が中心となり、次にそれと如何なる關係にあるかといふことが問題になるのである。イスラエルに於て神とは「ヤーウエ」(Yahweh)である。そこで、

(一) ヤーウエ神 イスラエルの先祖ヤコブが、ヤボクの渡しで神に遭ひ、「イスラエル」の名を賜つたが、それがイスラエルで、即ち「エル神支配す」であつた。エル神といふのは、併し恐らくセミツク族一般に用ひられた神表示であるとも云はれる。従つて嚴密には未だイスラエルの神としての名は明確にされてはゐない。モーゼが紀元前十五世紀に、アラビアの西北シナイ山に於て「ヤーウエ神」に接したといふ。併しこのときも明確に名前を指示したとは云へない。たゞ「我有りといふ者」(Ehyeh)、または「我は有りて在る者なり」(Ehyeh 'asher Ehyeh) (出埃及三・一四)と云ふのみ。聖書に於ては「ヤーウエ」を以て指示してあるのを、假りに今日「ヤーウエ」(Yahweh)と發音してゐるのである。

註 (ヘブル語舊約聖書には、*Y-h-w-h* の下に 'Adonai (主) の下段母音符號が附してある。(これは十六世紀からとも云ふ。)それで從來「エホバ」(Yehowah)と讀んだが、それは誤りである。それでは何故 *Y-h-w-h* に他の語の母音符號が附けられたのであるか。それは恐らく、モーゼ十誡にもある如く、「汝の神エホバの名を妄に口にあげべからず」によつて、普通にはこれを稱ぶを憚つた。たゞ大祭司のみが至聖所にあつてそれを爲すことが出来たとも云ふ。従つてその傳承は恐らく大祭司の家系にのみ傳えられたのであるが、或は大迫害のために、それが中絶されてしまひ、ために不明になつたのであらうとも云ふ。

も示す言葉だからである。古代猶太と我國上代との比較は別の機會に譲る。

3) 創世、32:28.

4) 出埃及、20:7.

5) A. B. Davidson; God (Hastings; Dictionary of the Bible II, p. 199.) 手塚儀一郎氏譯、「舊約聖書神觀」四一、二頁參照。

また聖書には神を示すに多く「ヤーウエ・エロヒム」となつてゐる。この「エロヒム」(Elohim)は、「エル」の複數形である。エルは先きにも示したやうに、セミチック族に廣く用ひられた神の呼稱である。従つて彼らの神を同じく表はすに違ひない。併し何故複數形を用ひるのであるか。神の本態が複數であるのではないことは明かである。その理由はよくわからないが、或は高位とか卓越とかを表はすものであらうと云ふ。因に、その動詞は單數を示してゐるのでも明である。

次に何故この様に二つの神名を重ねて稱ぶのであるか。その理由もよくはわからないが、多分資料の統合による關係ではないか。

このヤウエ神が、ケニ人のエル神であつたのではないかと云はれてゐる。それはモーゼがこの神に會つたのは、シナイ山に於てであり、ケニ人・ミデアン族と同盟を結んだときであつたからである。併しそれがよしケニ人の神であり、東方の影響を受けたものがあつても、モーゼ並にイスラエル族にとつては少しも差し支へない。何となれば、モーゼはそのとき、この神が、第一に先祖アブラハム・イサク・ヤコブ達の神であること、第二に彼自身及びイスラエルを埃及より救ひ出し、導いた神であること、第三にイスラエルの有力な一族レア族は早くからケニ人と結び、既に彼等の信仰をも享けてゐたと云ふこと、而もこのケニ人はイスラエルの傍族であつて、出埃及後の苦戦時代に有力なる同盟者となつたといふこと、それは當然にモーゼにも拜さるべくあつた。第四にこの神はイスラエル全族のみならず、異邦をも統べ且つ禮拜せらるべき天地創造の唯一絶對神であると意識せられたからであらう。即ちイスラエル族にとつてのヤウエ神は唯一神であつて、他族の神を認めるものでない。従つて或はモアブ族のケモシユ神、アンモン族のモロク神の如きその族にだけの唯一禮拜神とは違ふ。こゝにヤウエ神の世界性があるのである。

かくてヤウエ神は唯一絶對神であること、宇宙を創造し、人類を統べると共にイスラエルの神なのである。この神の本態は勿論見ることは出来ないが、その力、その榮光は色々なものによつて感んずることは出来る。例へば空に、風に、火に、水に於て等。次にこの神の性格については、色々なことが云へるが、まづ「聖なる神」<sup>12)</sup>と

6) 同上、p. 199. 三八頁。

9) 同上、3:7 以下。

11) Robinson; ibid.

14) 出埃及、6:3 etc.

7) 出埃及、2:15.

10) Robinson; op. cit. p. 92.

12) イザヤ書、6:3.

15) イザヤ、1:9; 6:3; 詩篇 84:1 etc.

8) 出埃及、3:6.

13) Robinson p. 93.

云ふ言葉が最もよく表はすであらう。そこには嚴肅なる距離感を與へる。時には荒神・山神・火神の如く見られるが、概して力の神として寫ることが多く、「全能の神」<sup>14)</sup>、或は「萬軍の神」<sup>15)</sup>とも云はれる。また支配の神、審きの神とも、時には「嫉みの神」<sup>16)</sup>とさへ寫る。これを要するに、義の神といふ印象を與へることが多い。併しヤーウエ神の本質は、恩寵の神、愛の神であるといふことは新約に至るまで變らない。ヤーウエが解放の神、救ひの神であるとはイスラエルの直感である。たゞヤーウエは飽くまでも權威ある存在であり給ふ。それは權力ではない<sup>17)</sup>。義を含まないでは止み給はない父の愛を持つ神である。

(二) **イスラエル族との關係即ち契約** ヤーウエ神がイスラエル族にとつては聖なる神、義なる神、力の神として畏敬されることが多かつたが、なほ本質としては恵の神、恩寵の神、愛の神であるとして打ち仰がれた。こゝにイスラエルとヤーウエとの深い關係があつた。

註 ヤーウエとイスラエルとの關係を考察する前に、一應このイスラエルとは團體的なりや個人的なりや、即ち民族全體に對してか個人に對してかと云ふ問題に觸れて置く。<sup>18)</sup> イスラエルといふ名前が、たとへばヤコブ獨りに與へられたものとしても、當時の狀態に於ては族長として當然に民族を代表したものであると考へられる。しかしそれから後に、神がイスラエル全族に同時に現はれたことは必ずしも屢々ではない。或は支族に宗族に、また家族に、或は個人に現はれ、また告げるといふこともあつた。そこで何れに重點があつたかと云ふことになるが、私は共同體といふものの眞の性質からして全體と個とを單に對立させて見ることは不可と思ふ。眞の生命的共同體にあつては、部分が全體のためにのみあるのではなく、同時に全體がまた部分のためにあるといふ內的聯關を考察しなければならぬと思ふからである。

ヤーウエとイスラエルとの特別な關係はまづ**第一に撰び**といふことにある。イスラエルの民が特に他の諸民族に先んじて撰ばれたといふ確信である。申命記七・七に「エホバの汝らを愛し汝らを撰びたまひしは、汝らが萬の民よりも數多かりしに因るに非ず、汝らは萬の民の中に最も小き者なればなり」とあるを以て明かな如く、ヤーウエがイスラエルを特に撰んだといふのは、選ばれるに相應しい價值がイスラエ

16) 申命記、6:15; 34:14.

17) この點も亦、和辻氏上掲書よりヒントを得た。  
18) 淺野氏、「聖書と民族」一〇四頁、及び「舊約神學に於ける諸問題」一六九頁以下。  
Cf. Hempel; op. cit. S. 33 f.

19) 申命、10:15. 20) 出埃及、3:17. 21) 民數、18:24; ヨシユア 17:14.

ルの側にあつたからではなく、寧ろその價值がなかつたからである。弱小の子は、最も親の愛を享けることが多いものである。故に子の側に於て誇るべき何ものもない筈である。なほそれ以外にも、「汝の先祖たちを悦びて之を愛し」<sup>19)</sup>たからである。これによつてイスラエルは子々孫々にヤーウエの被護を特に享けることが出来たのである。かゝる撰びは民についてのみ行はれたのではなく、その國土についても行はれたのである。その「乳と蜜の流るゝ地」は「エホバの嗣業」<sup>20)</sup>とされ、そこに多くの生産を興へ給ふた。

かくて撰ばれしものには自ら責任が湧くわけである。既にしてイスラエルは「神の民」<sup>21)</sup>、「エホバの民」<sup>22)</sup>、「聖き民」<sup>24)</sup>また「ヤーウエの所有」<sup>25)</sup>、「わが寶」<sup>26)</sup>とさへ稱された。「我は彼らの神となり、彼らは我民となるべし」<sup>27)</sup>とヤーウエは云ひ給ふた。然るにイスラエルは自らを顧みて、自ら潔からざるに潔きものとせられ、弱小なるものに萬軍のヤーウエが附き給ふ。この神の愛、神の恩寵に對して感謝・感恩の情は自らに湧くべく、同時に責任は強く呼び起される筈である。撰びは愛である。しかしまた試みでもある。イスラエルは特撰を享けた召命の民に相應しい試鍊を受ける。それは他の民族以上である。耐え得ざる苦悶の中にも、なほ神は究極の救ひを約束し給ふと絶叫する。神の國の到来とその主メシアの出現を限り無く待望するのである。

ヤーウエとイスラエルの特別な關係の**第二は**、自らにして**契約** (Berith) となる。この契約の内容は、まづ恩恵である。約束である。恵みを興へることである。「汝が建てたるものに非る大なる美しき邑々を得させ、汝が盈せるに非る諸々の佳物を盈せる家を得させ、汝が掘たる者にあらざる掘井を得させ給ふべし」<sup>28)</sup>とある。恵みは先づ人について、即ちイスラエルを嗣子となし且つその子孫を殖し、地についてはカナンを嗣業として永く興へ且つ多くの豊りを興へようと約束する――

「我々が契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て、永久の契約となし、汝および汝の後の子孫の神となるべし。

22) サムエル後、14:13.

24) 出埃及、19:6. 申命、7:6.

26) 出埃及、19:5.

28) Messiah; 受膏者、救世主。石橋智信博士、「メシア思想を中心とするイスラ

23) サムエル前、2:24.

25) イザヤ、43:1

27) エレミヤ、31:33.

我汝と汝の後の子孫に此汝が寄寓れる地即ちカナンの盆地を與へて永久の産業となさん。而して我彼らの神となるべし」<sup>30)</sup>

「我の目を擧げて、汝の居る處より西東北南を望め、凡そ汝が觀るところの地は我之を永く汝と汝の裔に與ふべし。我汝の後裔を地の沙の如くなさん。若し人地の沙を數ふことを得ば、汝の後裔も數へらるべし。汝起ちて縱横に其地を行き巡るべし。我之を汝に與へん」<sup>31)</sup>

かゝるヤーウエの恩恵の約束・契約は屢々繰り返へされた。そしてイスラエルが神の試鍊に耐えるとき、その故に世界の民は皆祝福を得んと云はれた。

「エホバ諭し給ふ。我已を指して誓ふ。汝この事を爲し、汝の子即ち汝の獨子を惜まざりしに因りて、我大に汝を視み、又大に汝の子孫を増して天の星の如く濱の沙の如くならしむべし。汝の子孫は其敵の門を獲らん。又汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし。汝わが言に遵ひたるによりてなり」<sup>32)</sup>

これらの言葉はアブラハム、イサク、ヤコブを初めイスラエルの先祖に屢々語られたところである。また從つてその後のイスラエルの歴史には、この様な神の恩恵による取計らひが屢々現はれたのである。併しまたヤーウエの約束は、單に物を與へ人を富ますと云ふ甘やかす關係ではなくて、常にそこには試鍊が與へられ、責任ある應答が要求されてゐることを注意しなければならぬ。<sup>33)</sup> ヤーウエはイスラエルにとつて、單なる自然的・血族的關係にあるものではない。むしろ聖なる神である。距離を常に保つ神である。その距離を飛び越え様とする火花の關係である。イスラエルにとつては畏敬すべき神である。全人格を傾けて應答すべき神である。契約と云ふものが、かゝる神の意志の表示だと云はれる所以である。<sup>34)</sup>

かくて要するに契約は、神の全くの恩恵であり、約束であると共に、そこには自ら責任を問はれてゐる云はゞ誓ひに似たる性質を持つてゐる。この神ヤーウエとイスラエル民との關係は、同時にイスラエル相互間の關係となり、かゝる意味での共同感情に基いて社會規範は保たれるのである。正に「契約を通して特別なる共同體を形作」<sup>35)</sup>

エル宗教文化史」參照。

29) 申命、6:10 以下。

30) 創世、17:7, 8.

31) 創世、13:17.

32) 創世、22:17, 18.

33) 淺野、「舊約聖書」四三頁。同、「舊約聖書に於ける契約思想の根本的意義」信仰と生活第十七號參照。

つたのである。この契約に基いてイスラエルの民族は統一されたのである。

ヤールウエがイスラエルに與へた契約の完成は、究極に於て神の國の到來に於てある。そのために先づ救主メシアが出現する。その待望の約束が契約の内容であつた。併しそれまでには、契約は色々な徴を以て現はれる。初めにはノアの「虹」<sup>36)</sup>となつた。アブラハムの「改名」<sup>37)</sup>、イサクの「割禮」<sup>38)</sup>、ヤコブの「石」<sup>39)</sup>、或ひはモーゼの「雲の柱、火の柱」<sup>40)</sup>、時には「櫃」<sup>41)</sup>でさへもある。併し契約の本脈は、大體に於て次の四つに表はれたと云へる。

(イ) 預言——預言は、所謂預言者を通して示された神の言葉であり、それは契約の一つの表はれである。預言者は、原語の意味によれば大體二つになる。一つは「見る者」(Ro'eh, Choleh)<sup>42)</sup>であり、他は「告げる者」(Nah)<sup>43)</sup>である。前者が幾分古いやうであるが、共にその働きは神の言葉を執成すことである。云はゞ、仲保者である。神の代辯者として「ヤールウエ斯く云ひ給へり」(Ko'amar Yahveh)と常に云ふ。正に「神の口」<sup>44)</sup>である。彼の心は鏡の如くなり、神の云はんとするところをそのまま語り、またこれを解釋する。<sup>45)</sup>「ヤールウエはその隠れたることをその僕たる豫言者に傳へずしては何事をも爲したまはず」と云ふ如し。<sup>46)</sup>

イスラエルの歴史に於て預言を爲す者と云ふのは可成り古くからあり、アブラハムの如きもその初めと見られるが、普通モーゼの頃からとする。<sup>47)</sup>その後士師時代の女預言者デボラ、サムエル、王朝時代のナタン、ガド。南北朝時代のエリア、エリシア等は有名である。彼らは諸族を勵まし、外敵を防ぎ、民族の統一を計り、時には王を選び、王を助けたが、また良くこれに忠告し、宗教的危期に警告を發したこともあつたが、併し多くの者は、祭所所の近くに群をなし、祭司を助けてゐたものゝ様である。<sup>48)</sup>

併し紀元前八世紀頃からは、少しく預言者の態度に變化が生じた。所謂記述預言者の時代となり、預言者の眞面目を發揮するやうになつた。アモス、ホゼア、イザヤ、ミカ、エレミヤ。捕囚後のエゼキエル、第二イザヤ、

34) W. Eichrodt; Theologie des Alten Testaments, I, Leipzig, 1933, S. 6.

35) 淺野、「舊約聖書」四一頁。

36) 創世、9:3.

37) 同、17:5.

38) 同、17:26.

39) 同、31:44.

40) 出埃及、13:21 f.

41) 民数、10:35 f. サムエル前、4:7 以下。

ダニエル等が特に有名である。彼らは時世に媚びず、權勢に阿らず、神の御旨を直示・直言して憚らなかつた。時に宗教の純粹と社會の正義とを主張し、また民衆の慰め手として世界史に顯著なものとなつた。

(ロ) 律法——ヤールウエとイスラエルの契約が、最も靈的・內的に表はれたものが預言であるとすれば、律法はそれが外的・形式的に表はれたものとするのが出來よう。律法は契約の條件であると云ふが<sup>51)</sup>、確にその一つである。

律法はまづモーゼの十誡に於て最も典型的に示されてゐる。そこには凡て「……する勿れ」とあるが故に、確に誡めである。モーゼは最高の裁判官であつたと云ふ。十誡の中は、宗教的規定とそれに基く倫理的・社會的規定とから成つてゐる。この様な順序は、その後の所謂契約書、申命法、聖潔法、祭司法等に何れも踏襲されてゐるこれらの諸律法の規定が神の意志の指示であり、命令であり、教訓であることは當然であるが、その本質が飽くまでも前掲、契約即ち約束の一つの表はれであることを忘れてはならない。然るにこれを上として取扱ふ祭司・教師等が後にたゞ形式的な意味に解したのは誤りである。

(ハ) 智慧——掃因後のイスラエルが、特に律法を重んずる様になつたが、その後智慧または教訓・文學の形式を以て、契約の民としての責任を自覺せんとする傾向が現はれた。これはペルシア、ギリシア等の文化の影響を多く受けた時代でもある。箴言、傳道書、ソロモンの智慧、ベン・シラの智慧、詩篇、ヨブ記、雅歌等は何れもかゝる傾向を示す。

(ニ) 默示——それから更に下つて、羅馬の統治下になつてから、特に默示といふ新しい形式が現はれるやうになつた。現實の壓迫の下に、なほ契約を傳え、それを釋かんとするとき必然に採られる型である。ダニエル書その他の神祕的・夢幻的な表現を採るものがそれであるが、所謂默示文學の形式を生み後に影響するところ大き

42) 聖書に於て、9回(サムエル書7回)。 43) 20回。 44) 300回。

45) エレミヤ、15:19; イザヤ、30:2。

46) Cf. A. B. Davidson; Old Testament Prophecy, Edinburgh, 1903, p. 79 f.

47) アモス、3:7。

48) 創世、20:7。



かつた。

#### 四 結

古代猶太の共同體が成立するためには長い準備の期間があつた。併しそれが具體的に明確な形を採つたのは、モーゼがシナイ山に於てヤウエと契約を結んだ頃である。出埃及が紀元前一四四五年頃であるとすれば、それから餘り遅くない時期である。

この共同體が成立するためには、神ヤウエと特別な關係にあつたといふことが大切である。特別な關係といふのは、まづ彼等が、特撰の民とせられたと云ふ自覺である。而も彼等にそれに適しい價值があるのではなくて、却てそれだけの價值が無い弱小の民であつたからである。

こゝに神の本質が、恩寵の神であるといふことが知られる。また民にはそれだけの責任が要求されてゐることが知られる。その關係は具體的には契約となつた。從て契約の内容は、神の恩惠の約束である。神の國到來の約束である。而もそれと同時に條件が置かれた。それが試鍊である。

彼らは特別な試鍊を受けねばならない。それは彼らが特撰の民だからである。そこに於て「主の僕」(Ebed Yahweh)の思想が現れた。自らは悲慘な生涯にあつても、それによつて他を救ひ、全人類を救ふことになるといふ、神の愛を最もよく表すものである。そこには既に「福音」(evangelion)の蔭が色濃く差し込んでゐる。かくて契約の意味は實は福音の徴なのである。預言者エレミアが「新しき契約」(Berith hadas baal)を立てる日來らん「われ我が律法を心のの上に録さん」と云つたのは、正にこの福音到來の預言である。

かくて要之、古代猶太の共同體を成立させたものは、契約である。それは時に預言・律法・智慧・默示などとして表はれた。而もこれを支へ且つ生成せしめた所以のものは、新しき契約(福音)への待望であつたと云ふことが出来る。(一六、三、卅一)

49) 例へば、D. P. Volz; Mose und sein Werk, Tübingen, 1932, S. 129. Cf. Prophetengestalten des Alten Testaments, Stuttgart, 1938.

50) W. R. Smith; Prophets of Israel, 1928, p. 84 f.

51) 淺野、「舊約聖書」四三頁。

52) 出埃及、20:1—17, 申命、5:6—21 53) 出埃及、18:13, 14.

54) 同、34:17—26, 同、20:23—23:33. 55) 申命、12—26.

56) レビ記、17—26. 出埃及、31:13—14. 民數、10:9; 15:38—41.

57) レビ、出埃及、民數の各書に多し。 1) イザヤ書、44:21 etc.

2) ロマ書、11:11 以下參照。 3) エレミヤ、31:31, 33.